

はじめに

アジア・日本研究所は、立命館大学発の「アジア・日本研究」という新機軸の研究分野において研究を推進し、その成果を国内外に発信することをめざして2015年に設立されました。文京洙先生は、創設時から2022年まで立命館アジア・日本研究機構副機構長と研究所副所長をお務めになり、研究所の発展に尽力いただきました。2022年からは上席研究員として、ご助言・ご指導をいただいています。

あらためて申し上げるまでもなく、日本における韓国研究、在日研究における文先生のご功績はきわめて多大かつ深遠なものであります。立命館大学は、今日では韓国研究や在日研究が盛んな大学として知られていますが、そこにも、文先生がパイオニアとしてご尽力を続けてきた成果が現れています。

アジア・日本研究所は新機軸の研究の推進をめざしていますが、その一方で、アジア研究、日本研究には長い歴史と、国内外における蓄積があります。どのような分野であっても、新しい地平を拓くためには、先達たちの成果や研究史の展開をきちんと踏まえる必要があります。本書は、そのような営為の一環として、企画されました。

文京洙先生は1977年に中央大学法学部を卒業され、1980年に法政大学の大学院社会科学研究所修士課程を修了、2006年に大阪商業大学から地域政策学の博士号を取得なさいました。立命館大学では1994年から国際関係学部でずっと教鞭をお取りになり、学部長もお務めになり、多くの後進を育成なさいました。現在は、立命館大学名誉教授、立命館アジア・日本研究機構上席研究員、コリア研究センター研究顧問をお務めです。

本書の編者の李眞恵^{イジンヘ}さんは、2009年に韓国外国語大学国際地域学部中央アジア語科を卒業、同大学大学院グローバル文化コンテンツ学科で2012年に修士号を取得した後、日本に留学し、2019年に京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科から博士号を取得、その後は日本学術振興会外国人特別研究員、立命館大学・専門研究員を経て、2023年からは立命館大学衣笠総合研究機構の助教としてお勤めになっ

ています。

李さんは、学部時代からカザフ語を学び、カザフスタンを中心とする中央アジアにおける朝鮮半島からの移民マイノリティである「コリョ・サラム」の研究を展開してきました。最近では、彼らの一部が韓国に「帰還」という現象の研究にも取り組んでいます。

李さんは、文先生がアジア・日本研究所副所長をなさっていた時に、文先生のご研究とお人柄に触れる幸運を得て、国際的な「コリアン・ディアスポラ研究」という視点から在日についても大いに学びたいということで、ご指導を仰いできました。それが本書の編集にもつながることになりました。

本書は、文京洙先生を講師としてお迎えした、立命館大学アジア・日本研究所主催の二つの講演、つまり、AJI インターディシプリナリー・セミナー「『在日』を考える：20 世紀の在日朝鮮人問題の形成・展開と最新の研究成果」、AJI ブッククラブ《著者は語る》「『済州島四・三事件：^{タムナ}島のくに」の死と再生の物語』（2008 年／2018 年）」の内容をまとめ、さらに、李さんによる文先生へのインタビューを収録したものです。

文先生は、本書の中で紹介されている『済州島四・三事件』（平凡社、2008 年／岩波現代文庫、2018 年）のみならず、単著『済州島現代史——公共圏の死滅と再生』（新幹社、2005 年）、『韓国現代史』（岩波新書、2005 年）、『在日朝鮮人問題の起源』（クレイン、2007 年）のほか、共著書、編集などに関わられた本を多数、出版なさっています。最近では、岩波新書で『文在寅時代の韓国——「弔い」の民主主義』（2020 年）という素晴らしい本も上梓なさいました。

文先生のご業績を読者の皆さまにお知らせするために、巻末にリストを掲載いたしました。

上に経緯を述べましたように、本書は、日本における韓国研究・在日研究の第一人者であられる文先生と、韓国から日本に留学したコリアン・ディアスポラ研究者の李さんの邂逅の結果、生まれました。先達の研究を継承し、さらに新しい研究をグローバルに展開するという、本研究所の目的にも合致する一冊であろうかと存じます。

読者の皆さまからの研究所に対するご支援・ご鞭撻を、今後もお願い申し上げる次第です。

立命館大学 立命館アジア・日本研究機構 副機構長
アジア・日本研究所長

小杉 泰